

## 亀裂か、移行か

### —— カント批判哲学における美と道徳性

小林 信之 (早稲田大学)

---

『判断力批判』において美しいものにかんする趣味の判断能力は、まずネガティブに特徴づけられる。論理的・概念的な認識判断から遮断されると同時に、その基本性格である無関心性によって欲求能力からも切りはなされる。欲求能力には、実践理性に規定された意志もふくまれる以上、美への観想的態度が純粹で自律的であるためには、道徳的・実践的態度との関係の否定を帰結せざるをえない。つまり美を観想する者は、対象の表象によってひきおこされた快の感情を通じて、みずからの心の動きに反省的にむきあいつつ自律的な判断をくださねばならない。美と道徳のあいだには、両者をへだてる深い亀裂 (Kluft) が口をあけているようにみえるのである (序論II)。

しかしながら他方でカントが、実践理性と趣味の能力、道徳的判断と美の判断とのあいだに一種の類比的でパラレルな関係を見ていたことも指摘しておかねばならない。真の道徳性と無関心性とにもとづく判断は、いずれも理念的にはつねに妥当するものとみなされねばならないとしても、経験的には、わたしたちが実際に正しい判断をくだしているのかどうか不確かであり、したがって道徳的判断と同様、美の判断も、事実認識をおこなっているのではなく、普遍妥当性にたいする権利要求にとどまるのである。このような類比的関係がみとめられるとすれば、わたしたち人間の自然的条件を実践理性の道徳的自由へと媒介する働きとして、趣味の能力の可能性を考える道が開かれることになる。そして自然から自由への移行 (Übergang) や架橋を可能にする奉仕的機能が判断力のうちにみいだされるとともに、カントがそこに批判哲学全体の体系性への見通しをみてとったことも容易に理解できる。さらにそうした体系的展望は美を道徳性の象徴とみなす議論 (§ 59) にも連関している。

だが、以上のように一方でそれぞれ自律的な純粋能力間の亀裂を認めながら、他方で融和的に移行を要請することに矛盾は生じないのだろうか。そもそも亀裂と移行とはどのように連関するのか。たとえばガイヤーやアリソンは、純粋な趣味判断の自律を承認する場合にのみ、美は道徳的自律に奉仕できるとする一種調停的なカント解釈を提起している。また晩年のアーレントは、実践理性と反省的判断力、理性の自由と共通感官の社交性との差異を認めつつ後者のうちに政治哲学的意義を探求している。

本論の課題は、最終的には、批判哲学における亀裂と移行の意味を問うことであるが、そのさい、カント哲学内部に整合性や予定調和を求めるのではなく、あくまで自然と自由のあいだの亀裂から目をそむけず、趣味の「自己自律」が道徳的自由の実現に奉仕的にはなりえないことの意味を考えたい。つまりカントにおける道徳的立場は、普遍化原理の徹底を意味するとすれば、感じる働きの根底にある判断力の自律性ないし固有性とは、けっして両立しえないままにとどまるのではないかと問いたい。